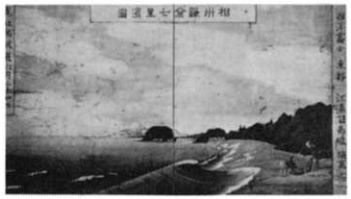
―新収品―

**絹本油彩**
**47.0×73.7**

「東西の交流」展には、このたび当館が購入した司馬江漢筆「七里ケ浜図」(写真上)が初公開されます。

司馬江漢(1747？―1818)は江戸時代のもっとも有名な洋風画家で、一時は日本洋画の開祖と誤まり考えられていたこともあります。彼は画業のほかに、オランダ伝来の自然科学の紹介者、社会思想家、人生の哲学者、および随筆文学者として活躍しました。絵画の遺作も、洋風画のほかに漢画、大和絵、浮世絵などがあり、西洋画法に基ずいた作品のうちにも、輸入西洋画の模写的作品と創作的な日本風景図とがあります。このように江漢の業績は大へん多方面にわたっており、それを不用意に一括して論評することはできません。しかし、美術史の上での彼のもっとも注目すべき仕事は、油絵や銅版画(エッチング)のような西洋画の技法を用いて、日本の風景を描いたことにあると言うことができましょう。新収品「七里ケ浜図」は、絹地に荏油(えのあぶら)を溶剤とする油絵具で描いた油絵で、江漢の代表作の一つです。



江漢は文化8年(1811)に書いた随筆、「春波楼筆記」のなかで、「予二十五年以前より、日本の山水富士をはじめ、名山勝景を写真にして、阿蘭陀の法を以て、蠟画に画き、諸国の寺院仏閣の額に掛け、諸侯貴客へも数々認め遣しければ、世に之を奇観とす」と言います。事実、彼は洋風画の普及をはかるために蠟画(油絵)の絵馬を全国各地の社寺に奉納しましたが、そのうち現存するものはごく僅かしかありません。ここにお見せする「相州鎌倉七里浜図」(神戸市立南蛮美術館蔵)は寛政8年(1796)の作で、かって江戸芝の愛宕山祠に絵馬として掲げられていたものですが、このたびの当館の新収品はこれと図柄がよく似ています。江漢は天明7年(1787)に銅版画の七里ケ浜図を制作したのをはじめとして、油絵、水彩画などで、同じ場所を何度も描いています。「真白き富士の嶺、緑の江ノ島」とのちに歌にもうたわれた七里ケ浜は、江戸っ子江漢の愛してやまない風景でした。

彼の油絵は、今日の眼で見れば幼稚な段階にあります。しかし、見なれぬ画法でとらえられたこの壮大な海景を見て、江戸時代の人はどんなに驚いたことでしょう。

**司馬江漢筆　相州鎌倉七里浜図**
**神戸市立南蛮美術館所蔵**

季刊 美のたより No.32
昭和50年 6月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.